

資 料

看護学科における学生生活支援に対する学生評価

——アドバイザー制度に関する調査票の分析から——

大 森 裕 子・江 島 仁 子・西 村 美登里
原 田 江梨子・吾 妻 知 美Student's Level of Satisfaction with the Student Life
Support System in a Nursing ProgramOHMORI Hiroko, EJIMA Hitoko, NISHIMURA Midori,
HARADA Eriko and AZUMA Tomomi

抄録：甲南女子大学看護学科では、2007年の開設当初よりアドバイザー制度を設けている。今回、学生のアドバイザー制度活用の実態やアドバイザー制度に対する意見を明らかにする目的でアンケート調査を行った。結果、学生はアドバイザー制度を必要としているが、アドバイザー教員を十分に活用できていない、学年によりアドバイザー制度の活用状況は異なる、アドバイザーグループ毎に開催される懇親会は、メンバー交流の機会として有効に機能していることが明らかになった。

キーワード：学生生活支援、看護学生、アドバイザー制度

は じ め に

現在の看護学生は、学習面、経済面、友人・家族関係において様々な問題を抱えて入学し、入学後は、新たなストレスが生じ学習継続が困難になる場合があるといわれている¹⁾。そのため、学生が心身ともに安定した学生生活を送れるよう支援が望まれており、本学では、2007年の看護学科開設当初より、学生生活支援を目的にアドバイザー制度を設けている。本学におけるアドバイザー制度は、学生の修学、学生生活、健康、進路、人間関係など大学生活に関わる諸問題について、担当のアドバイザー教員が相談できる機会と時間を保証する制度である。

アドバイザーグループの編成は、学部生に対しては1学年10名前後（4学年で40名程度）の学生に教員が3名、編入生に対しては編入2年生および3年生を教員2名で担当している。そして、この編成および教員は基本的には4年間持ち上がりとするこ

とを目的としている。また、複数のアドバイザー教員を配置することで、多角的な視点からのアドバイスを可能にするとともに、学生が相談相手を選ぶ権利も同時に保障している。

これまで学生の支援は、教員が一方的に相談に応じるのではなく、定期的な個人面談やグループ単位の懇親会を実施し、学生の顕在的、潜在的な問題状況の把握に努めてきた。また、同学年のグループ間交流のみならず、学年を超えた交流の機会を設け、先輩から後輩に学生生活のアドバイスを気軽に受けられるよう配慮してきた。

今回、学生のアドバイザー制度活用の実態やアドバイザー制度に対する意見など明らかにすることを目的にアンケート調査を行った。この結果は、今後の本学の学生支援の在り方を検討し充実するための基礎資料になると考える。

I. 研究方法

1. 調査対象とデータ収集期間

対象者：本学看護学科全学生

データ収集期間：

平成24年2月21日～3月28日。平成23年度後期終了後に行われた教務課オリエンテーション時にアンケート用紙を配布し、10分程度アンケートを記入するための時間を設けた。

2. データ収集内容および分析方法

- 1) アドバイザー制度の必要性については、「必要」「不必要」「どちらでもない」の回答を設けた。
- 2) アドバイザー教員との関わりについては4項目(①勉強の相談ができた、②学生生活の悩みの相談ができた、③進路の相談ができた、④就職の相談ができた)の質問に対し「必要なかった」「全くできなかった」「あまりできなかった」「かなりできた」「できた」の回答を設けた。
- 3) アドバイザーグループメンバー間の交流については懇親会に関する5項目、①(懇親会)は有意義だと思う、②(懇親会)は同学年の交流に役だった、③(懇親会)は先輩との交流に役だった、④(懇親会)は後輩との交流に役だった、⑤(懇親会)は教員との交流に役だった)の質問に対し「全く思わない」「あまり思わない」「少し思う」「かなり思う」の回答を設けた。
- 4) アドバイザー教員との関わりについては、「必要なかった」「全くできなかった」との回答にはその理由を尋ねた。
- 5) 分析は、量的データは単純集計を行った。自由記述に関しては文脈の意味内容を考慮しながら類似した内容についてカテゴリー化を行った。分類の妥当性は研究者が数回の協議を重ねることで確保した。

3. 倫理的配慮

アンケートの質問内容は、看護学科全教員と倫理委員会委員長に図り同意を得たうえで作成した。またアンケートの実施及び結果について看護学科全教員に同意を得た。

対象者には文書及び口頭にて研究の目的と方法および結果公表時の匿名性の保証と強制ではないことについて説明した。アンケートは無記名とし、回収は、記入後にその場で回収箱に投函することを依頼した。ま

た、調査への参加・中止は自由で参加の拒否や中止による不利益のないことを説明した。

II. 結果

1. 調査対象と回収率

1年生107名、2年生91名、3年生101名、4年生69名に対し実施した結果、回収率は1年生94名(87.9%)、2年生45名(49.5%)、3年生93名(92.1%)、4年生68名(98.6%)であった。

2. アドバイザー制度の必要性について

アドバイザー制度の必要性については、全学年でみると「必要である」は214名(71.3%)、「不必要である」は3名(1.0%)、「どちらでもない」が69名(23.0%)、無回答14名(4.7%)であった(図1)。

学年別にみると、全学年で60%以上の学生がアドバイザー制度は必要であると回答しており、3,4年生になると80%弱の学生が必要としていた。不必要と回答した学生はごく少数であり、1,3年生はゼロ、2年生1名(2.2%)、4年生2名(2.9%)であった。どちらでもないと回答した学生は1,2年生が約30%であり、3年生14名(15.1%)、4年生13名(19.1%)であった(図2)。

3. アドバイザー教員との関わりについて

1) 「教員に勉強の相談をすることができた」(図3)

1年生と2年生では「できなかった(全くできなかった・あまりできなかった)」とする割合が80%弱と高く、「できた(かなりできた・できた)」とする割合は10%程度であった。3年生、4年生と学年進行とともに「できなかった」とする割合は減少し(3年生：

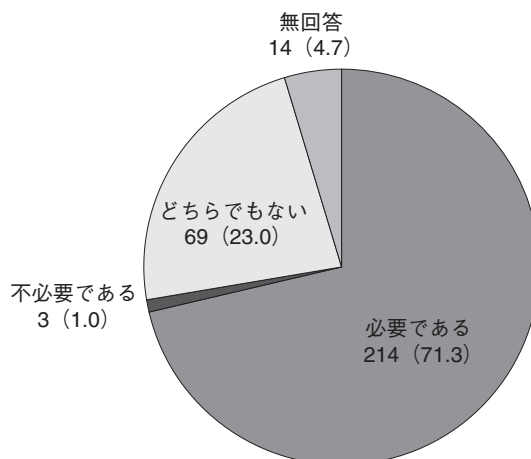


図1 アドバイザー制度の必要性(全学年 n=300)

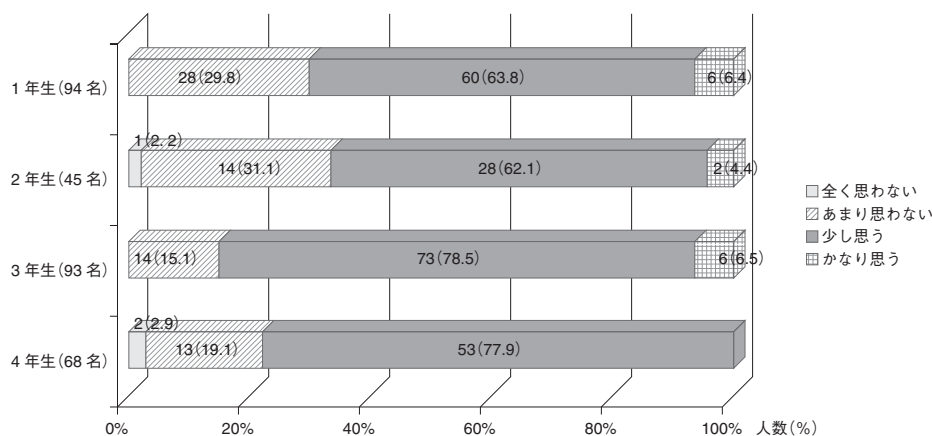


図2 学年別アドバイザー制度の必要性

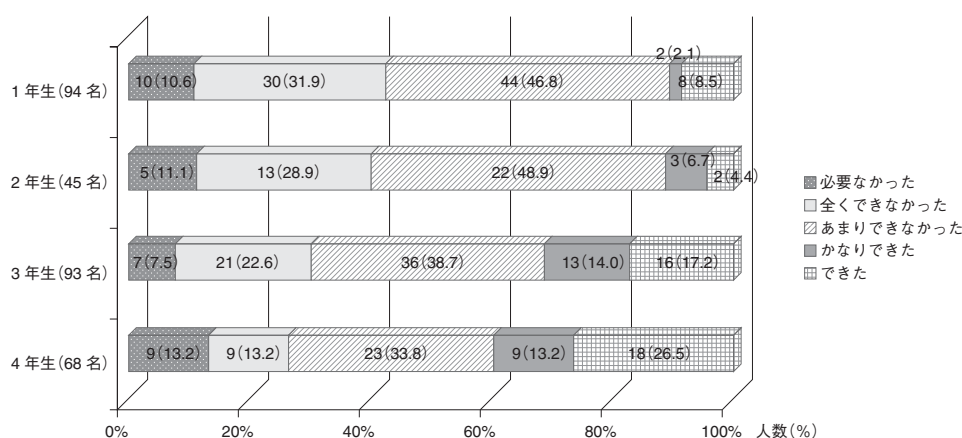


図3 教員に勉強の相談をすることができた

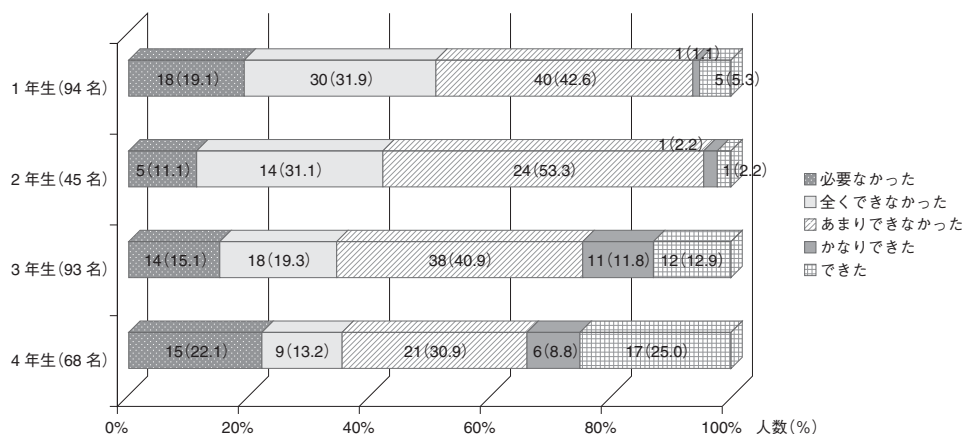


図4 教員に学生生活の悩みを相談することができた

61.3%, 4年生: 47.0%), 「できた」とする割合は増加した(3年生: 31.2%, 4年生: 39.7%)。「必要なかった」は学年間で差はなく, 10% 前後であった。

2) 「教員に学生生活の悩みを相談することができた」(図4)

1年生と2年生は「できなかった(全くできなかった・あまりできなかった)」とする割合が高く(1年

生: 74.5%, 2年生: 84.4%), 「できた(かなりできた・できた)」とする割合は低かった(1年生: 6.4%, 2年生: 4.4%)。3, 4年生と学年が進むにつれ「できなかった」とする割合は減少し(3年生: 60.2%, 4年生: 44.1%), 「できた」とする割合(3年生: 24.7%, 4年生: 33.8%)と, 「必要なかった」とする割合(3年生: 15.1%, 4年生: 22.1%)が増加した。

3) 「教員に進路の相談をすることができた」(図5)

1年生と2年生は似たような傾向にあり、「できなかった(全くできなかった・あまりできなかった)」とする割合が高く(1年生:74.5%, 2年生:77.8%), 「できた(かなりできた・できた)」とする割合は10%程度であった。3年生では「できなかった」とする割合が68.8%, 「できた」とする割合が24.7%, 4年生では「できた」とする割合が47.1%になり「できなかった」とする割合(32.3%)を上回った。「必要なかった」とする割合は4年生が20.6%と最も高かった。

4) 「教員に就職の相談をすることができた」(図6)

1～3年生は「できなかった(全くできなかった・あまりできなかった)」とする割合が高かった(1年生:74.5%, 2年生:82.2%, 3年生:74.2%)。4年生では「できた(かなりできた・できた)」とする割合が41.2%になり「できなかった」とする割合(32.3%)を上回った。「必要なかった」とする割合は4年生が26.5%と高く, 1年生は20.2%, 2年生は15.6%, 3年生は9.7%であった。

4. アドバイザーグループメンバー間の交流について

毎年アドバイザーグループ毎に, 教員を交えた懇親会を開催しており, 教員や学年を超えたグループ間での交流を図っており, 開催の時期, 場所, 方法などはグループに一任されている。この懇親会を学生がどのように捉えているのかを調査した結果である。

1) 「懇親会は有意義だと思う」(図7)

懇親会を有意義と捉えている(少し思う・かなり思う)学生の割合は高く, 1年生78.8%, 2年生86.7%, 3年生78.5%, 4年生67.6%であった。

2) 「(懇親会は) 同学年との交流に役立ったと思う」(図8)

学年間にほとんど違いはみられず, 「役立った(少し思う・かなり思う)」と答えた割合が全学年で90%近くみられた。

3) 「(懇親会は) 先輩との交流に役立ったと思う」(図9)

「役立った(少し思う・かなり思う)」と答えた割合は1, 2, 3年生では80%以上であった。4年生では63.2%と高いながら, 他の学年と比較すると低く,

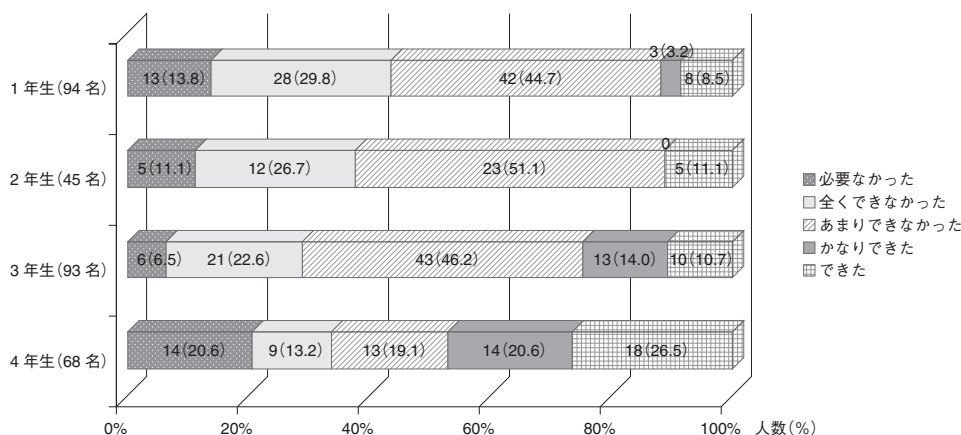


図5 教員に進路の相談をすることができた

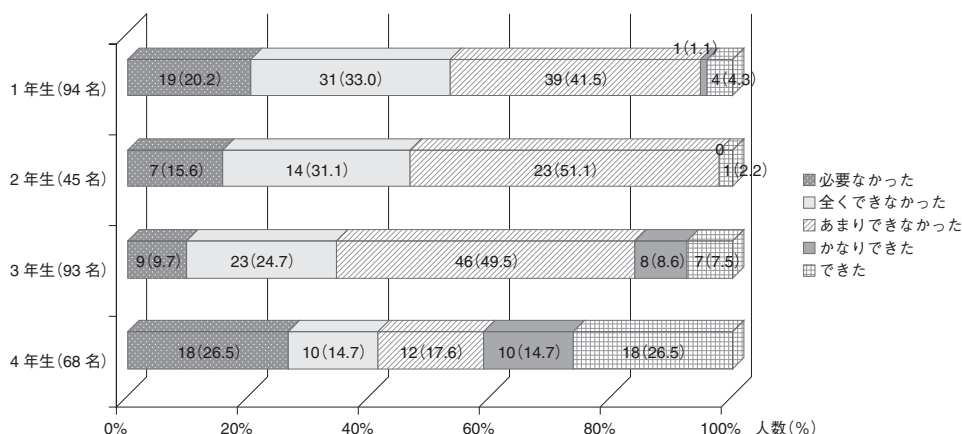


図6 教員に就職の相談をすることができた

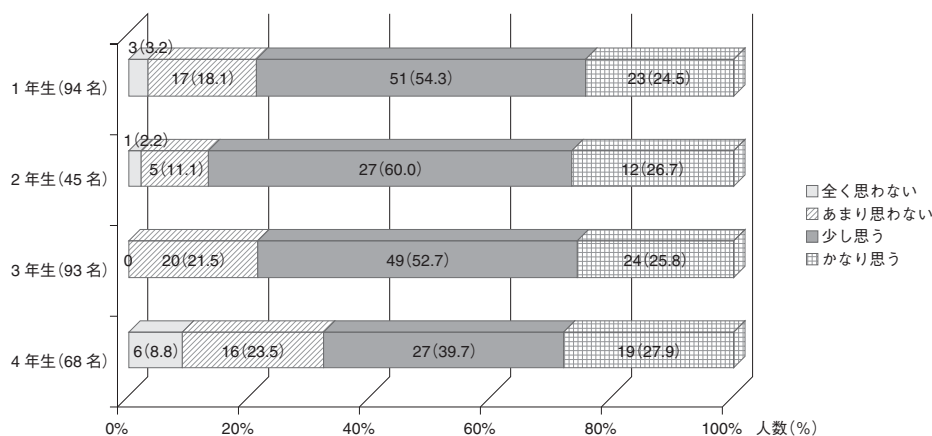


図7 懇親会は有意義だと思う

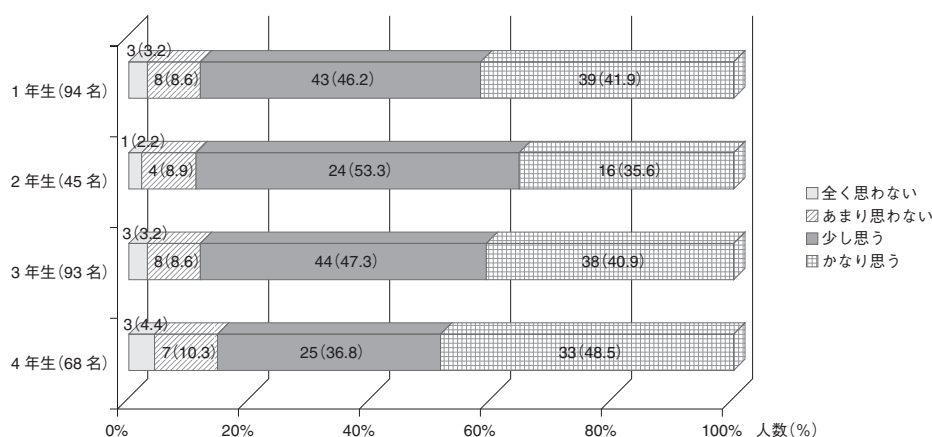


図8 同学年との交流に役立ったと思う

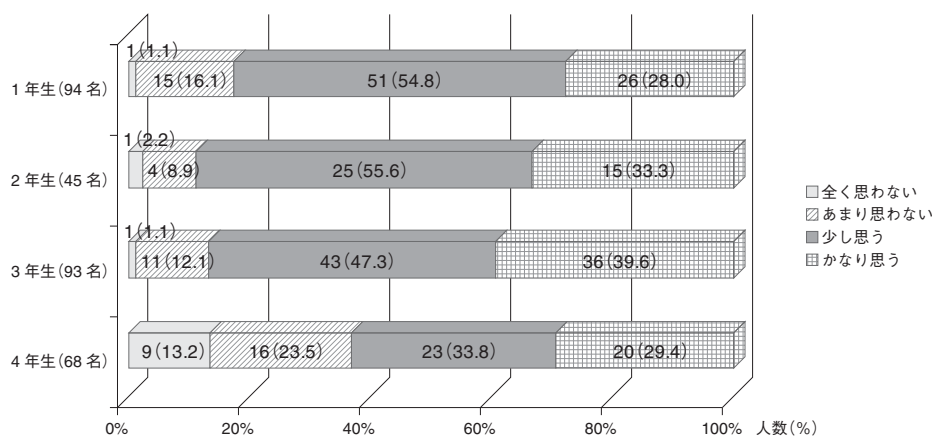


図9 先輩との交流に役立ったと思う

「役立ったと思わない（全く思わない・あまり思わない）」が36.7%と高い傾向にあった。

4) 「(懇親会) 後輩との交流に役立ったと思う」(図10)

1年生以外への質問である。「役立った（少し思う・かなり思う）」と答えた割合は2年生77.8%、3年生73.9%、4年生56.7%と全学年で50%を超えて高

いが、4年生が他学年に比べ低い傾向にあった。

5) 「(懇親会) 教員との交流に役立ったと思う」(図11)

「役立った（少し思う・かなり思う）」と答えた割合は高く、1年生81.7%、2年生77.8%、3年生82.6%、4年生72.0%であった。

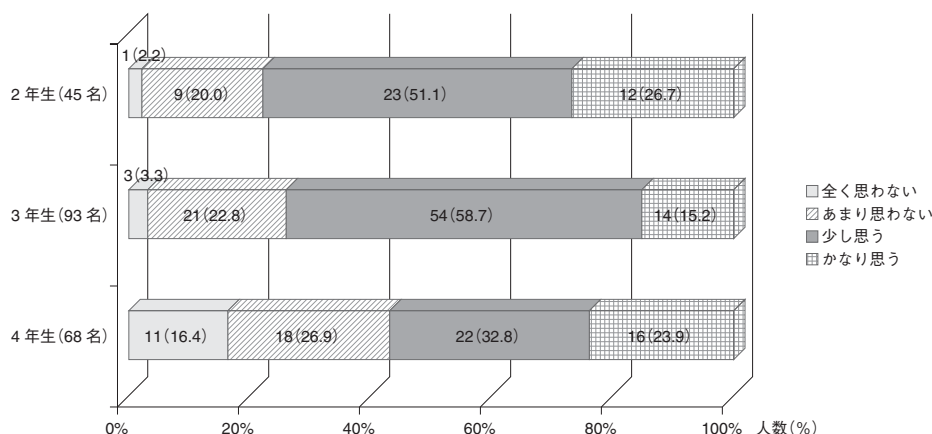


図10 後輩との交流に役立ったと思う

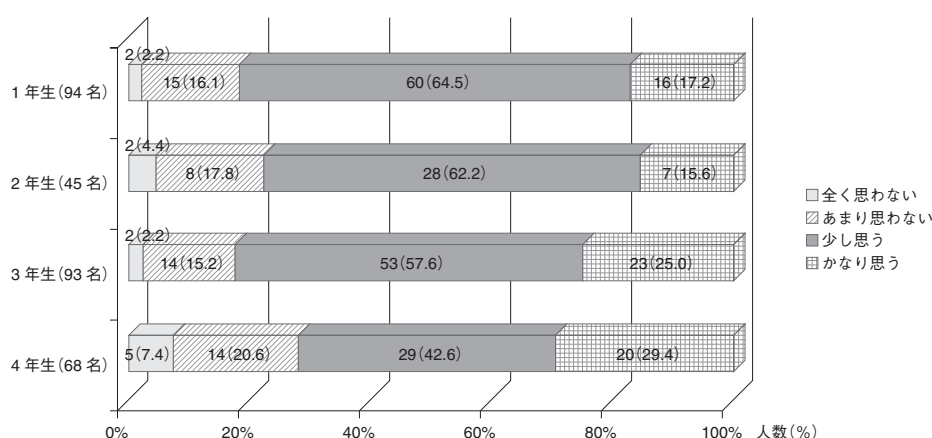


図11 教員との交流に役立ったと思う

5. アドバイザー教員との関わりができなかった理由 (表1)

1) 各カテゴリーと学年の傾向

アドバイザー教員との関わりについて「必要なかった」「全くできなかった」理由として、すべての学年で4つの共通する以下のカテゴリーが抽出された。

【教員に相談する事柄がなかった】は、特に悩みがなかった、必要なかったなどであった。【教員との相談の機会がない】は、関わる機会がなかった、時間がなかったなどであった。【教員に相談しづらい】は、話しづらい、行きにくいなどがあつた。【アドバイザー教員以外に相談した】は、友人に相談した、他の教員に相談したなどであった。

4つのカテゴリーで、1年生は、【教員に相談する事柄がなかった】が最も多く、2年生以降は【教員との相談の機会がない】が最も多かった。

2) 【アドバイザー教員以外に相談した】について

1年生の相談相手は友人のみであった。しかし、2年生以降はアドバイザー教員以外の教員に相談するこ

とができていた。アドバイザー教員以外の相談者としては、各看護学領域の教員、実習担当教員、授業科目の教員、自身の希望する領域や病院を知っている教員であった。

3) 【教員との相談の機会がない】について

1年生は、関わる機会がないことを理由とする学生が多いが、2年生は教員が多忙であることや教員がいる時間がわからないことを理由としていた。また、3、4年生は、学生自身が多忙になり、学生と教員共に時間がないことを理由としていた。また、教員との連絡の取り方がわからないといった理由もあった。

4) 【教員に相談しづらい】について

1, 2, 3年生では、教員との関係ができていないことから、話しづらい、行きにくいといった理由が挙げられた。さらに、3, 4年生では、教員が忙しそうや怖くて距離がある、他の教員に伝わるのではないかなどの教員側の理由が挙げられた。4年生では、アドバイザー教員が交代したことを理由としていた。

表1 各学年のアドバイザー教員との関わりができなかった理由

カテゴリー	データ (件数)			
	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生
教員との相談の機会がない (49)	・関わる機会がない ・機会を作ることができなかった ・面談してほしい ／(12)	・関わる機会がない ・交流がない ・教員がいない ・時間がない ／(10)	・時間がない、タイミングがない ・学生が機会を作れない ・関わる機会がない ・相談の仕方がわからない ／(13)	・時間が合わない ・教員がいない ・面談してほしい ・実習で忙しく時間がない ／(14)
教員に相談しづらい (30)	・話しづらい ・言い出せなかった ・人間関係を作れない ・行きにくい ／(11)	・したいと思わない ・教員との間に距離がある ・行きにくい ／(4)	・自分から訪れることがない ・話せる関係ができていない ・気を使う ／(7)	・自分が原因で話づらい ・アドバイザー教員が交代した ・教員が原因で話しづらい ／(8)
教員に相談する事柄がなかった (29) ・必要がなかった ・悩みがなかった ・話すことがない ／(13)	・相談事がない ・就職のことは考えていない ／(2)	・悩みがなかった ・普段から交流がある ・進路や就職のことは考えていない ／(11)	・相談することがない ・相談する内容でない ／(3)	アドバイザー教員以外に相談した (18)
・友人に相談した ／(2)	・周りにいる人に相談した ・授業科目の教員に相談した ・友人に相談した ／(4)	・他の教員に相談した ・友人に相談した ／(5)	・実習の教員に相談した ・非常勤の教員に相談した ・友人に相談した ／(7)	

Ⅲ. 考 察

1. アドバイザー制度の活用

アドバイザー制度としてのアドバイザー教員を活用できなかった学生の割合が「勉強」「学生生活」「進路」「就職」のいずれにおいても高かった。

ここで問題となるのは「できなかった」とする学生である。「できなかった」の選択には、アドバイザー教員への相談が必要であった、相談したいという欲求があったにも関わらず何らかの事情で叶わなかったと読み取ることができる。また、1年生の具体的な相談事がない時期であっても、相談する機会を求めていることがわかった。

大学生となり生活環境や学習方法の変化に適応していく上で、一人で対処するには困難な状況にある場合、第3者に相談するという行為は必要不可欠なものである。ただ青年期にある学生の相談相手として最も多いのは友人であり、教員が相談相手としてあげられることは少ない^{2),3)}とされているが、現実には相談相手としての教員へのニーズは高いことが示された。近年の学生は対人関係をもつことが苦手で、学生間のコミュニケーションが不足している⁴⁾ため、本来は友人間の交流や支え合いで解決していく内容でも、友人の代わりとして教員を必要としていることが考えられる。そのためにも、教員は学生の相談相手として求められていること、その一方で学生からコミュニケーションをもつことが苦手であることを察し、入学初期か

らアドバイザー学生と話をしやすい関係づくりをすることが必要であると考ええる。

しかし、学年が進むに従って「できなかった」とする学生の割合は減少し、4年生ではすべての項目において「できなかった」とする割合は30～40%となり、「できた」もしくは「必要なかった」とした学生が半数以上を占めた。「進路」「就職」など友人間では解決できない問題が生じてくれば、学生は自らアドバイザー教員に相談している。また、「必要なかった」とする割合が下の学年に比べ高い。このことは、学生がアドバイザー教員に限定せず、適切な場所、適切な人物に相談するという対処能力を身につけて行動に移していると考えられる。1,2年生に対しては教員側からの積極的なアプローチが求められているが、3,4年生に対しては学生の主体性を育成するという視点に立った姿勢で学生の活用ニーズに応じることも大切である。

さらに、学年を追うごとに学生と教員共に多忙であり、時間を取りにくいことが理由であったため、教員との時間調整やメールなどの具体的な手段を伝えることも必要であると考えられた。

2. アドバイザーグループメンバー間の交流

アドバイザーグループ毎に開催される懇親会は、同学年、先輩、後輩、教員との交流に役立っているとしている学生が多数を占めた。開催時期は決められていないが、前期実習が始まる前の4月に実施しているグループがほとんどである。新たな学年が始まる時期に行われることで、後輩にとっては先輩から学業や実習

のことなどをきき、今後の心構えに備える貴重な情報収集の機会になっている。特に1年生にとっては、新たな環境に馴染み、ネットワーク作りを助ける機会となっている。

しかし、懇親会開催には異なる学年間での開催日時の調整や開催場所の確保など様々な問題も生じている。今後はアドバイザーグループ毎の情報交換を行い、より有意義な懇親会が開催できるよう工夫していくことが望ましい。

お わ り に

学生はアドバイザー制度を必要としており、アドバイザー教員に対する様々なニーズの高さが明らかにな

った。活用状況は学年によって異なっており、教員は学生の状況に応じた働きかけが必要である。また、アドバイザーグループ毎に開催される懇親会は学生間、学生・教員間の交流に役立っていることが明らかになった。

文 献

- 1) 松本京子, 萩原一美: 学生が望む学習者支援, 医療 2009; 63(10): 637-640.
- 2) 池田望, 澤田いずみ他: 学生生活実態調査からみえてきたものー学生支援ワーキンググループ活動報告ー, 札幌医科大学保健医療学部紀要 2005; 第8号: 59-65.
- 3) 倉田真由美: 高校生・大学生の相談状況と自己肯定感との関係, 思春期学 2008; 26(2): 257-260.
- 4) 前掲書 3)